



有害物質から子どもを守る会(秋田・宮城)

会報 31 「HPV ワクチンの真実①子宮頸がんは多いのか？」

ホームページ: <https://askhh.mkn-hospital.com/>

<日医ニュース最新号(第505号、平成28年6月5日)>

日本医師会の定例記者会見の記事「子宮頸がんの予防について」をここに紹介します。

釜薙(かまやち)敏常任理事は子宮頸がん予防のためのHPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンについて説明し、積極的な接種を求めるとともに、キャッチアップ制度が来年3月までとなることから、対象者には9月末までに1回目の接種を済ませるように呼び掛けた。同常任理事は、「日本医師会はHPVワクチンの普及にずっと取り組んできたが、直近の統計では年間1万1000人が子宮頸がん罹患し、約2000人が亡くなっている」と危惧。子宮頸がんを防ぐためには、HPVワクチン接種が重要であることを改めて訴えていく姿勢を示した。…HPVワクチンについては、従来の2価・4価に加え9価も接種可能となっているとした上で、副反応等は2価・4価と同等であることを強調。15歳になるまでに接種を開始する場合、2価・4価は3回接種が必要になるのに対し、9価であれば2回の接種で完了するとした。…

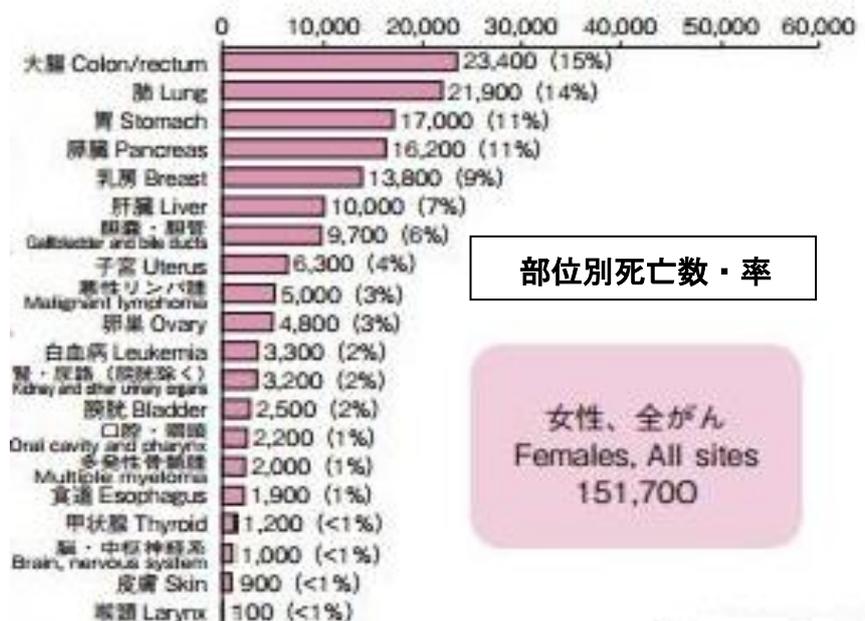
<女性の部位別のがん罹患数・率と死亡数・率>



上記のように「年間1万1000人が子宮頸がん罹患し、約2000人が亡くなっている」というが、問題は他のがんとの比較である。左図は女性のがんの部位別罹患数である。国立癌研究センターの統計によると、2022年に癌と診断された女性の総数は434,900人で、多い順に乳がん(22%)、大腸がん(16%)、肺がん(10%)、胃がん(9%)、子宮がん(7%)、膵臓がん(5%)、悪性リンパ腫(4%)、甲状腺がん(3%)、卵巣がん(3%)、肝がん(3%)の順である。

がん罹患しても、その治りやすさ、治りにくさに違いがあり、部位別のがんの死亡数とその%(死亡率)を見る必要がある

(右図)。乳がんと子宮がんは治癒率(≒5年生存率)が高いので、死亡数・率の順位はそれぞれ5位と8位に下がり、治癒率が低い肺がん、すい臓がんの死亡数・率の順位はそれぞれ2位、3位に上がる。

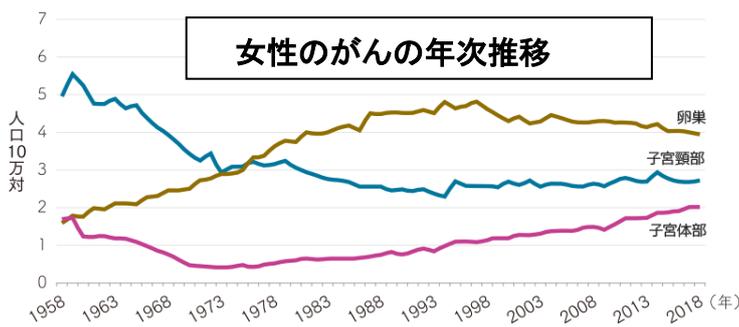


部位別死亡数・率

女性、全がん
Females, All sites
151,700

<子宮がんについて>

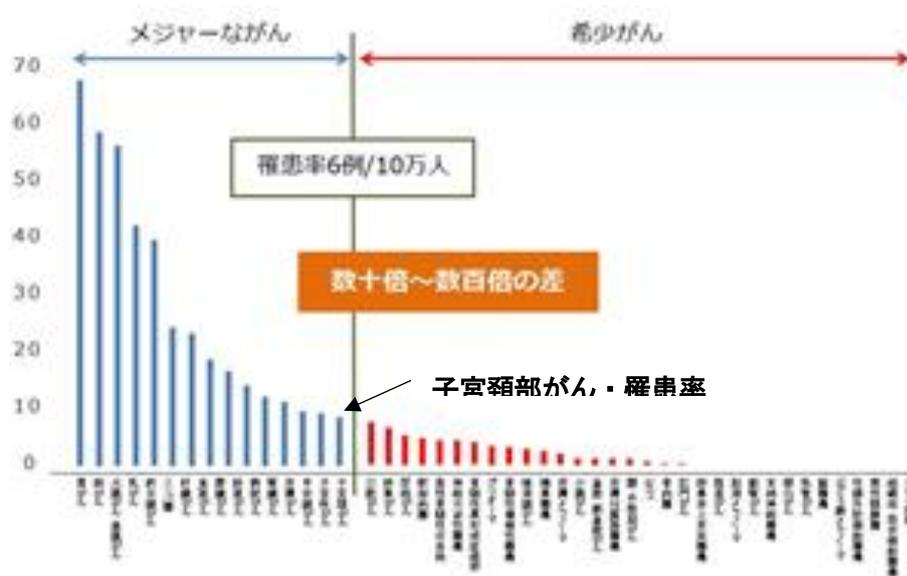
子宮がんには体部がんと頸部がんがあり、病因的に別物と考えられている。体部癌は食生活の



欧米化が主な原因と考えられており、1970年以降一貫して増加傾向にある。頸部がんはヒトパピローマウィルスの感染が発がんに関係していると考えられている。現在、婦人科における治療（手術）数では、体部がんが次第に増え、最近では頸部がんより多くなってきている。

(子宮がんに占める体部癌：1960年代：5% → 1970年代：10% → 1980年代：15%~20% → 1990年代前半：30% → 2000年代後半：50%)

<頸部がんは希少がんにも近い>



人口10万人あたりの罹患率が6人以下のがんを希少がんと呼ぶ。子宮がんを体部がんと頸部がんに分けると、左図のように頸部がんは罹患率でメジャーながんの内、最も希少がんに近いがんで、5年生存率は76.5%（2009-2011年）と高く、検診と手術で対応可能ながんである。

<ワクチンを推奨する学者・婦人科医が用いる図>



左図は子宮頸がんの罹患率と死亡率を年齢別に示したもので、ワクチンを推奨する学者・婦人科医がよく使うものである。若い世代における罹患率の上昇はもっぱら頸部の「上皮内がん」を頸部がんを含めているからである。上皮内がんが本当に悪性のがんであるなら、その数年後に死亡率が上昇するはずである。40~60歳までの小さい上昇に寄与しているようではあるが、60歳以降の罹患率は死亡率に相関している。こちらは本当に悪性の子宮頸がんと考えられる。

<付記>

上皮内がんについては次号で説明するが、自然退縮が多く、上皮内がんを除くと子宮頸がんは罹患率で希少がんにも近く非常に少ないのが真実である。女性のがんの対策の重要度は大腸がん、肺がん、膵がんの方が大きい。
(文責：加藤純二 2024/7/1)